

「I-T点呼」を積極導入

日本梱包運輸倉庫 全拠点への拡大めざす

日本梱包運輸倉庫(黒岩秀隆社長、東京都中央区)は二月から、安全性優良事業所(Gマーク営業所)に対して認められた「I-T点呼」を実施。三月末時点で、埼玉県内の三営業所でI-T点呼を行っているが今後、全拠点への展開を検討している。安全統括管理者の柳澤常夫常務と品質安全管理部安全指導課の橋本演之課長に話を聞いた。

「対面」と変わらぬ効果

I-T点呼はGマーク(原則、深夜・取得のインセンティブ)早朝)に限り、一つのI-T点呼として「貨物目録」による点呼と同等の「対面」による点呼と同等の「対面」の一部改正に効果を有するものとした。一月から通常の「対面」点呼と並行してテスト。同一事業者の複数「対面」点呼を行うことが出来るようになった。開散時の連続八時になった。



ドライバーの顔色もしっかりチェック

物流フリーマーケット

「サブライチチェーン」とは「ある商品が消費者にわたるまでの生産・流通プロセス」である。メーカーは調達した原材料をもとに商品を生産・製造し、小売業者が購入することになる。そして、その流れを情報で共有し、急ぎの生産・流通

「対面」の仕組み

意識して「対面」も重要になる。部品調達や卸売業、小売業などを経由する際、商品売買の受注契約などが何層も交わされるが、こうした受発注などの契約の流れが「対面」である。商流を的確に捉えることで、それに伴うモノや情報の流れも可視化されることになる。SCMとは物流、商流、キャッシュフローを共に

三月末時点で、埼玉県の三芳、和光、児玉の三営業所でI-T点呼を実施。三芳で点呼を執行し、和光と児玉の運転者が点呼を受けている。開散時間帯に限られているため、I-T点呼を受けているドライバーは十人程度。

同社が用意したのは、パソコンと東海電子の点呼システム。カメラやマイク、スピーカー、免許リーダーなどに加え、点呼を執行する三芳にはパトライントを置いた。一拠点につき、約七千八百八十

武蔵貨物自動車(高橋勝正社長、埼玉県川越市)を中心とする参加し、無事故表彰、武蔵貨物グループは六日、埼玉県トラック総会で行った。前週には東北合教育センター(同地区の大会が開かれ、谷市)で平成二十年交

参加人数となった。高橋社長は、昨年の車禍事故発生件数が四十五件と、この十年間で最も少なかったことを報告。「県警から招いた指導員が各店を巡回して行う安全教育の成果が出ている」と評価した。

鮮明な動画で健康面も管理
始業点呼の場合、ドライバーが運行前点検を済ませた後、アルコール検知機に息を吹き込むと、点呼システムが稼働し三芳のパトライントが点灯、点呼の要求を感知する。あとは対面点呼と同様のやりとりがなされる。

「対面」で行っていたものを機械に変えただけで、かかる時間もほぼ同じ。デメリットはほとんどない。鮮明な動画なのでドライバーの顔色もしっかり分かり、安全確保にも問題はない」としている。

同社は東京都と栃木県、群馬県でI-T点呼の申請をしており、東京と栃木では既に許可が下りた。現在は、貨物自動車運送事業所の九四〇にあたる四十八拠点でGマークを取

Gマーク営業所は一万近くに増加し、I-T点呼も制度発足から一年が経過しているが、加を達成し、今年には既に二十三台と目標の半分近くの増加が決まっているという。

の、検討に時間がほとんど普及してないのが実態だ。この機器なら大丈夫というものが最初から分れば、もっとI-T点呼も普及するのではなかと指摘。また、「点呼記録簿をファックで営業所に送付しなければならぬが、電子化ができればより効率化を図れる」と考えている。



橋本演之課長(左)と柳澤常夫常務

「ロジ最新事情」プロロジス